

保育学生を対象として実施した 「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム」の効果検証

Verification of the Effect of 'Psychological Simulation Activities for Understanding the Difficulties of LD, ADHD and PDD' Conducted for Students of Early-Childhood Education

赤瀬川 修
Osamu Akasegawa

鹿児島女子短期大学

保育者には、発達障害に対する知識及び支援技術が求められている。それらの獲得をすることと共に、発達障害などを有する子どもの立場に立ち、その心情によりそう保育や支援が求められる。そのため保育学生を対象として「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム」の導入を試みた。このプログラムは、子どもたちがその困難さゆえに感じている苛立ちや不安、自信の無さなどの感情やストレスを疑似体験することで、子どもの立場に立って支援について考えることを目的としたものである。

プログラム実施後にアンケートによる効果測定を試みた結果、焦りや苛立ち及び不安についての理解については、おおむね高い達成度となった。また、子どもへの接し方、具体的な支援方法について具体的に考えることについても、高い達成度であった。このことから一定の教育効果があったと考えられる。その一方で、プログラム実施者が事前に十分に準備をすることや受講者への適切な働きかけの重要性、及びグループ討議のための環境構成への配慮などの重要性が明確となった。

キーワード：発達障害、LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム、保育学生、特別支援教育・保育

1. 研究動機及び目的

近年、保育所・認定子ども園、児童養護施設、児童自立支援施設など様々な児童福祉施設において、発達障害を有する児童もしくは発達障害を有すると思われる児童が通所・入所しており、それらの成長・発達及び自立をめざして保育士らが保育、療育にあたっている。全国保育協議会調査（2011年）では、障害者手帳をもつ子どものいる保育所が75.7%、手帳を持っていないが特別な支援を必要と判断される子どもがいる保育所の数は84.3%となっている。また、厚生労働省調査（2013年）によると児童養護施設入所児童の28.5%が障害等を有しており、広汎性発達障害児が5.3%、ADHD児4.6%、LD児が1.2%を占めている。また、児童発達支援センターなどの療育施設とその利用者数も年々増加しており、保育士には、発達障害を含む様々な障害についての理解と子どもへの適切なかわり方や療育などの支援の知識や技術が求められている。発達障害をもつ子どもについての理解、療育などの支援技術、障害児等の保護者支援技術等を有する保育士を育成することが、保育士養成施設に課された責務の一つともいえるだろう。

そこで筆者は、保育者をめざす学生が発達障害等を有する子どもを体験的に深く理解し、その支援について理解を深めることを目的として、保育・教職実践演習の授業において「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム」を試行的に導入し実施した。本プログラムの実施によって、学生が発達障害を有する子どもらの心情、接し方、支援等についてどのように理解できたか検討し、今後の課題について見出すことを目的として本研究を行う。

2. 研究の方法

対象は、本学児童教育学科・幼保コースに在籍する学生のうち、筆者が保育・教職実践演習を担当するクラスの学生37名である。2016年10月に「保育・教職実践演習」授業において実施した。

今回の授業で用いた「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム」は、日本LD学会及び特別支援教育士認定協会によって開発されたものである。日本LD学会会員であり、特別支援教育士認定協会主催の「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム講師認定講習」を終了した筆者がプログラムを実施した。なお、教員1名が運営のサポートにあたった。実施時間は、出席確認・準備等が約10分、プログラムの説明及び4つのプログラムの実施が70分、アンケート記入が約10分、合計90分であった。

3. プログラムの実施

(1) 「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム」の概要

本プログラムは、子どもたちの困難さを追体験するのではなく、子どもたちがその困難差ゆえに感じている苛立ちや不安、自信の無さなどの感情やストレスを疑似体験することで、子どもの立場に立って支援について考えることをねらいとしている。プログラムの主な目的は、①LD等発達障害のある子どもが、日頃学校生活や学習場で経験していると思われる困難さや、それに伴う感情、ストレスなどについて、心理的疑似体験を通して理解する、②教師、支援者、保護者などの参加者が、心理的疑似体験を通してそれぞれの立場でLD等発達障害のある子どもにどのような支援ができるのか、どのように接すればよいのかについて具体的に考える、の2点である。

プログラムの内容としては、LD等発達障害のある子どもの困難さについて、「読む」「書く」「計算する」「聞く」「話す」「不器用さ」の領域ごとに示している。各領域の内容は、以下の5つのステップワークで構成されている。それは①実際に経験する、②グループ討議でうまくいかなかった原因やその時の気持ちを考え、話し合う、③子どもの困難さと結び付けて、実際の教室等での支援を考える、④ワークでの講師の声かけをどう感じたか話し合う、⑤講師からの解説を受ける、である。この5つのステップを通して、それぞれの困難さの背景要因や具体的な支援の手立て等について理解を深めることを目指す。

なお、プログラムの実施にあたっては、実施者はテキストと付属ソフトを用いて実施する。スライドをプロジェクターなどに映写し、実施者がPCを操作しプログラムを進める。

(2) 筆者による「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム」の実施内容

プログラムは、5つの領域に関する17のワークが用意されている。すべてのワークを実施することが教育効果は高いと思われるが、時間の制約があるため、今回は実施するワークを絞ることとした。なお、講師認定講習会の際にも、指導講師よりすべてのワークを実施する必要はないとの指導を受けている。対象学生が幼・保コース（幼稚園教諭免許及び保育士資格の取得を希望する学生が所属するコース）であるため、6つの領域の中で、特に幼児期での発達の躓きが多い「聞く」「話す」「不器用さ」に領域を絞り、「聞く」の領域から2つ、「話す」の領域から2つ、「不器用さ」から1つの合計5つのワークを実施することにした。しかし、実施の時間が不足し「不器用さ」に関するワークを実施することができず、4つのワークの実施となった。

実施したワークは、ワーク10「一斉指示に気づかれなかったり聞きもらしたりする」（刺激が多い場面での指示理解の体験）、ワーク11「複数の指示を聞いて作業する」（たくさんの指示を聞いて覚えられないことの体験）、ワーク13「図形の伝達」（説明している内容を相手にうまく伝えられないことの体験）、ワーク15「あいまいな物事の説明」（知っているが上手に説明できないことの体験）である。

それぞれのワークでは、必ず最後に講師による説明がなされるが、解説までスライドに示されているワークもあれば、解説のないワークもあった。解説がないワークの場合、口頭による説明だけでは十分な理解が困難だと判断し、認定講習会資料等を参考に、解説資料をパワーポイントで作成し説明を行った。

4. プログラムに対するアンケート調査

(1) アンケート調査の概要

約80分のプログラム実施終了直後に、受講した学生（37名）に対し、アンケート調査の目的、方法を説明し同意を得たのちに、質問票を配布しおよそ10分後に回収をした。すべての学生から回答を得た。

8つの質問に対し記述回答をもらった。質問1は、プログラムについて、有意義なものであるか質問した。質問2から質問4では、LD、ADHD等のある子どもたちの感じている焦り、苛立ち、不安について体験を通じて理解することが出来たか質問した。質問5及び質問6では、LD、ADHD等のある子どもたちに対してどのように接すればいいのか、どのような支援をすればいいのか具体的に考えることが出来たか質問した。質問7では、このプログラムで、特にどのような気づきや学びがあったのか記述回答してもらった。質問8では、改善点を記述回答してもらった。

(2) アンケート調査の結果

質問1から質問6に関するアンケートの結果は、表1の通りである。

表1 質問1～質問6の回答結果

質問	設 問	1 そう思う	2 ややそう思う	3 あまり そう思わない	4 そう思わない
1	このプログラムは、有意義なものでしたか	31名 83.8%	6名 16.2%	0名 0.0%	0名 0.0%
2	「焦り」について体験を通して理解をすることが出来ましたか	29名 78.4%	8名 21.6%	0名 0.0%	0名 0.0%
3	「苛立ち」について体験を通して理解をすることが出来ましたか	20名 54.1%	14名 37.8%	3名 8.1%	0名 0.0%
4	「不安」について体験を通して理解をすることが出来ましたか	25名 67.6%	11名 29.7%	1名 2.7%	0名 0.0%
5	どのように接すればいいのか具体的に考えることが出来ましたか	18名 48.6%	19名 51.4%	0名 0.0%	0名 0.0%
6	どのような支援をすればいいのか具体的に考えることが出来ましたか	20名 54.1%	17名 45.9%	0名 0.0%	0名 0.0%

質問7では、「本日実施したプログラムを通して、特にどのような気づきや学びがありましたか？箇条書きで簡潔に記述して下さい」と質問し、37名すべての者が回答を記述した。

回答の内容にもとづいて、「子どもの心情の理解」、「障害の理解」、「子どもへのかかわりや支援についての理解」、「その他」の4つのカテゴリーに分類しまとめる。

①子どもの心情の理解（回答数26）

・子どもの心情の理解（回答数15）

「LDなどの子どもたちは、このような思いで毎日生活をしているのだと思った」、「LDやADHDのある子どもの気持ちを実際に考えることができた」、「LD等の子たちの気持ちを経験することが出来てよかった」、「障害のある子どもの目線に立つことができた」、「今までの学習では、実際に聞いたり映像を見るだけで、LD・ADHDを持つ子どもたちの気持ちまでは深く知れなかった」、「何が起きているのか理解できないという子どもの気持ちがあった」などの回答があった。

・子どもの心情（特に焦りや苛立ち、もどかしさ、ストレス等）の理解（回答数11）

「伝えたい気持ちはあるが、上手に伝えられないもどかしさを感じた」、「相手に伝わらないもどかしさや歯がゆさを体験でき、子どもたちの特徴をしっかりと理解することが出来た」、「相手に伝わらず不安になったり、焦ったりという気持ちを共感できた」、「LDやADHDの子どもがこのようなストレスを感じていることが、身をもって理解できた」、「相手に思いをわかってもらえない憤りを体験できた」などの回答があった。

②障害の特性の理解（回答数1）

「LD・ADHDについて、少しは理解することが出来てよかったです」との回答があった。

③子どもへのかかわりや支援についての理解（回答数37）

・具体的な支援方法について述べられた回答（回答数20）

「視覚的な情報伝達の有効性について」が8名、「環境の設定の重要性について」が3名、「簡潔に話すことの大切さについて」が4名、「落ち着いて焦らず接することの大切さについて」が3名、「受容的な態度の重要性について」が2名などとなっている。

「視覚的なものがとても大事だと思いました」、「視覚化したものを提示することで、理解が深まりやすくなることに気づいた」、「指示が多いと分かりにくかったり、視覚表示は大切だと思った」、「個別に声かけをしたり、視覚的に伝わるようなメモをその子どもだけに渡すなどの援助方法を学ぶことができた」、「ジェスチャーやメモの大切さに気付いた」、「周りの支援や環境設定が大切だと思った」、「LD・ADHDのある子どもに対しては、環境を変えることで生活しやすくなると知った」、「保育者が焦らず、落ち着いて相づちを打つことなどが大切だと思った」、「障害に関わらず相手に伝える際には、簡潔に話すなどの配慮することが大切だと思った」、「その子どもにも合った言葉掛けや聞く姿勢、環境など大切だ

と思った」,「受容的な態度で相手の話を聞き焦らせてはならないと思った」などの回答があった。

・具体的な支援方法以外の回答 (回答数17)

「いつも保育者の視点で子どもとの関わりについて考えているが、このような子どもの視点から見出していくものも良いと思った」,「疑似体験を自らしたことによって、どのような工夫をしていけばLD・ADHDの子どもたちにとって生活・勉強していきやすくなるのか考えることができた」,「保育者として関わり方や言葉かけの注意点を理解することが出来た」,「LD・ADHDのある子どもの視点に立って経験することで、様々な困難なこと等を知ることができ、改めて支援の大切さに気付くことができた」,「普段の友達や家族への声掛けを見直して、うまく表現していきたいと思った」,「障害のある子どもへの配慮も大切だが、その他の子どもへの配慮も同じように行っていくべきだと思った」などの回答があった。

④その他 (回答数21)

先述したカテゴリには属さない回答としては、次の回答があった。プログラムを通して自らが体験したことについて述べた内容及び感想が多く、考察までは到達していないものであった。

「時間を指示されて焦りが出てしまい、焦ると全てうまくいかないと感じた」,「たくさんの指示を覚えられないととても不安でドキドキする」,「作業中に話しかけられると焦る」,「多くの指示を短時間にこなすことはとても困難で、メモをとれたらよいのと感じた」,「言葉やイラストの伝え方では、普段は何気なくしているジェスチャーや連想ができないというのは苦戦しました」,「頭の中では理解できていても、口に出し相手に伝えるとなると、正確に伝えなければならないと思って、言葉が出てこないことがあった」,「障害のある子どもの立場になることで、障害の理解ができる」,「実際に体験することでわかることがあった」などの回答であった。

質問8では、「本日実施したこのプログラムについて、改善したほうが良い点があれば箇条書きで記述してください」と質問した。回答数は6であった。

回答内容としては「悪い指導、良い指導どちらも体験できたらよい」,「もう少し自然に注意をしても良かったのではないかと思う。ワーク11の際にあまりうざったさを感じませんでした」,「画面に表示している文字を少し拡大してほしい」,「電子黒板が人の頭で少し見えづらかった」,「緊張する部分もあった」,「ワーク13では、もどかしさを感じる前に時間になってしまって、あまりもどかしさを感じるができなかった。50秒では短いと思った。せめてあと10秒は必要だと思う」,「ワーク15で言葉をあてる際に、理解出来ず始まったので、誰もがよく使う言葉の方がよかった」であった。

5. プログラム実施者による振り返り

筆者が本プログラムを実施したのは今回が初めてであった。事前に準備を行い前日にリハーサルも行い実施に臨んだ。準備をする中で、まず検討したのはワークの選択であった。17のワークが本プログラムでは用意されているが、およそ80分という時間の制約がある上に、保育士及び幼稚園教諭を目指す学生に対してどのプログラムを選択すべきか検討することは難しい作業であった。本プログラムでは、受講対象者について特に指定はされていないが、多くの内容は小学校教員や学齢期児童の支援にあたる者を対象としているとの印象を得た。時間の制約がなければ、17のすべてのワークを実施し理解を深めさせたいが、時間の制約のある中での実施となったため、受講者のニーズに合わせたワークの選定が必要となる。そのため、筆者が就学前児童に特に躓きが多いと思われる領域(聞く、話す、不器用さ)に絞り、さらにその中から5つのワークを選び実施する計画を立てた。しかし、これがこの選択が本当に良かったのか疑問は残る。

また、計画では5つのプログラムの実施を予定していたが、予定通りに進めることができず、4つのプログラムしか実施できなかった。初回ということもあり、実施者の進行の不慣れさ、プログラム実施時間の見通しの甘さも影響していると思われる。

6. 考察

アンケート調査結果等をもとに本研究の考察を行いたい。

まず、本プログラムに対して、すべての学生が有意義なものであった(そう思う、ややそう思う)と回答している。有意義の意味のとらえ方にも様々なものがあるが、少なくともプログラムを通して何らかの学びや気づきの機会が得られたといえるだろう。

次に、本プログラムの大きな目的である、焦りや苛立ち及び不安についてプログラムでの体験をもとに理解することができたかということについては、焦りについては100.0%、苛立ちについては91.9%、不安については97.3%の学生が理解

できた（そう思う、ややそう思う）と回答した。おおむね高い評価となり、一定の効果があつたと言えるだろう。しかし、一方で苛立ちについては、「そう思う」と回答した者は約半数にとどまり、十分理解できないと1割弱の学生は感じている。ワーク10は、教室における場面の動画を見て体験するプログラムであるが、ワーク11やワーク13及びワーク15では、学生が実際に活動（作業、他者への言葉での説明）をして様々な経験をやるプログラムとなっている。焦りや苛立ち、不安といった感情は、時間の制限があること、記憶を保持できない、指示が理解できない、言葉で適切な説明ができないといったことにより生じるものであるが、それに加え実施者がワークの最中に心理的負荷を与える言葉かけや態度が重要となる。今回、特に苛立ちを理解することができなかつた学生がいた理由として考えられるのは、実施者が学生に対して十分な心理的負荷を与えることが出来なかつたことが大きいと推測される。プログラムを遂行することに気を取られ、声掛けを忘れてしまう場面も多く、したとしても態度や口調が言葉と一致しておらず、学生に心理的負荷を与えることができなかった。

次に、子どもにどのように接すればいいのか、どのような支援をすればいいのか具体的に考えることができたかということについては、全ての学生が理解できた（そう思う、ややそう思う）と回答している。おおむね高い評価であり、一定の効果があつたと言えるだろう。一方で、いずれも「そう思う」という回答が約半数にとどまった理由としては、グループ討議の人数や時間、実施者による解説が影響していると考えられる。今回はグループ討議を2名で実施したが、経験に基づく思いを共有化したり、意見を交わすには2名は不十分であるように思えるため、グループの構成人数についても検討が必要であると感じた。また、そのためには討議のための時間の確保も必要となる。グループ討議は、体験をより深めるためには必要不可欠なものであるため、さらに丁寧に実施すべきであると考えた。また、実施者による解説であるが、これも支援をする上での道標を示す重要なものである。解説のないワークについては、筆者が作成した資料をもとに補充して説明を加えたことで理解を深めることができたかと思われるが、体験及びグループ討議後に、受講者の習熟度に合わせた説明を加えることは、より理解を深めるためにも、偏った理解について修正を加えるためにも必要であるだろう。ただし、このプログラムはあくまでも、子どもの苛立ちや不安、自信の無さなどの感情やストレスを疑似体験することを重視しているため、受講者それぞれの個別の感情や感覚も丁寧に扱い、支えることも求められるだろう。

7. おわりに

今回の研究を通して、本プログラムが学生の発達障害児理解を促し、支援方法についての理解を深めるために一定の効果を持つことが明らかになった。しかし、その一方で、実施者がプログラムの実施の前に十分に準備をすること、実施者が受講者に適切な働きかけをすること、グループ討議のための環境構成に配慮することなど、いくつかの課題を見出すことができた。

心理的模擬体験プログラムは、保育者が自らの支援について見直し、より当事者に寄り添った支援を実施するために有益なものとなるだろう。今回の研究を活かし、課題に解決に向けて取り組み、より効果的な実施ができるよう訓練を重ねていきたい。

最後に、本プログラム実施の際にご協力頂いた鹿児島女子短期大学丸田愛子先生、プログラムに参加しアンケートに協力して頂いた鹿児島女子短期大学児童教育学科2年（2016年度）の学生の皆様に深く感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 全国社会福祉協議会全国保育協議会「全国の保育所実態報告書」平成24年9月。
- 2) 厚生労働省児童家庭局「児童養護施設等入所児童等調査結果（平成25年2月1日現在）」平成27年1月。
- 3) 一般社団法人特別支援教育士資格認定協会「LD・ADHD等の心理的疑似体験プログラム（第3版）」一般社団法人日本LD学会、平成28年2月。
- 4) 一般社団法人日本LD学会上野一彦「LD・ADHD等関連用語集（第3版）」日本文化科学社、平成23年1月。

(2017年12月1日 受理)